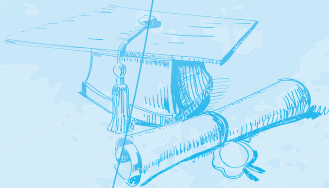


大学教育開発研究シリーズ
NO.23 ● Jun. 2015

海外大学における博士号取得

— 立教大学教員の体験をきく —



立教大学
大学教育開発・支援センター

ISSN 1881-1035

海外大学における博士号取得 —立教大学教員の体験をきく—

立 教 大 学

大学教育開発・支援センター

はじめに

日本の高等教育に対する公財政支出が、OECD加盟国中、GDP比で下から2番目という事実はよく語られます。この状況は日本政府の判断であると同時に、国民による日本の高等教育機関に対する評価、いや、失望の表れなのかもしれません。この事態を真摯に反省したうえで、次の一手をわれわれ大学人が考えなければならない時期に来ているのではないのでしょうか。

これまで高等教育改革といえば、どちらかという学士課程教育の話題が中心でしたが、学士課程教育を改めようと思えば、当然その未来の担い手を育成する大学院教育こそが議論されるべきなのです。当センターでは、2006年5月から大学院教育についてリサーチを開始し、2010年からは特に博士学位取得および授与に関する調査を行ってきました。その間の成果の一部は、2冊の大学教育開発研究シリーズにまとめられており、本報告書が同シリーズでは3冊目ということになります。いわば本書は「大学院教育3部作」の完結作です。

さて、その中身は、2013年当時の寺崎昌男当センター顧問発案による海外博士学位取得体験インタビューの記録です。立教大学に勤める教員のうち、海外で博士号を取得した9名の方に、学位取得までの過程をインタビューし、その内容を文字に起こしたものです。インタビューにご協力いただいた先生方の所属は6学部と1研究科に及び、また学位を取得した国は、米・英・仏・独の4か国、取得年齢も20代後半から、教授職にある年齢の方まで多岐にわたっている点が大変特徴的です。

このインタビューは、基本的には、半構造化インタビューとして実施されており、博士課程入学以前に関すること、博士課程のプログラムの概要、授業料や生活費などの費用面、研究指導の在り方、研究の進展具合等を共通質問事項として取り上げています。それぞれの先生方のご回答は、ごく個人的なご経験ではありますが、その内容からこれまでの日本の大学院教育を省み比較してみると、大きな違いに驚きます。たとえば、海外では大学院生に対して金銭面で手厚い援助が行われており、大学としてまたは国家として、優秀な人材や研究への投資をするというスタンスがはっきり見えてきます。一方で、「短期間で目に見える成果を出す」ことが強く求められていることも特徴的かもしれません。その他にも様々

な相違点が示されています。

本インタビュー報告は、先生方それぞれの「格物致知」の過程が本当に良くわかる内容になっています。海外の大学院の実態が分かるのはもちろんのこと、ひとりの研究者が育つ過程に加えて、先生方の人生の一部が垣間見られるなど、読み物としても大変興味深いものに仕上がっています。様々な場面で多様な目的でご活用いただけるものと思います。ぜひご一読ください。

最後になりましたが、インタビューにご協力いただきました9名の先生方に、深く御礼申し上げます。

大学教育開発・支援センター副センター長、経済学部准教授

小澤 康裕

はじめに 小澤 康裕	2
------------	---

第1部

1. このインタビューをなぜ企画したか 寺崎 昌男	11
1) プロジェクトの始まり	11
2) センターのミッションとして	13
3) センターが積み上げてきたもの	13
4) 刊行の意義	15
2. プロジェクトの概要 谷村 英洋	19
1) プロジェクトの進行	19
2) インタビュー調査の概要	19
3) 本報告書について	21
ご協力いただいた先生方の一覧	23

第2部

1. 師岡 淳也 先生 (異文化コミュニケーション学部 准教授)	27
2. 田島 夏与 先生 (経済学部 准教授)	51
3. 韓 志昊 先生 (観光学部 准教授)	77
4. 松永 正樹 先生 (経営学部 助教)	97
5. 栗田 和好 先生 (理学部 教授)	127
6. 鳥飼 玖美子 先生 (異文化コミュニケーション研究科 特任教授)	155
7. 豊田 三佳 先生 (観光学部 准教授)	191
8. 石川 文也 先生 (異文化コミュニケーション学部 教授)	217
9. 前田 良三 先生 (文学部 教授)	245
あとがきに代えて 寺崎 昌男	276